

コンストラクションとしての日本語の語彙的複合動詞*

陳奕廷

キーワード：語彙的複合動詞，コンストラクション形態論，全体性，使用頻度，用法基盤モデル

1. はじめに

本研究は日本語の語彙的複合動詞(影山 1993 などを参照)における様々な非合成的・非分析的な性質を取り上げて考察し、これらの性質は従来の合成的なアプローチではうまく説明できないことを示す。そして、「コンストラクション形態論(Construction Morphology, Booij 2010 などを参照)」という理論モデルを取り入れることで、語彙的複合動詞における「合成的(compositional)」と「全体的(holistic)」という二つの側面を同時に捉えることができると主張する。加えて、「用法基盤モデル(usage-based model, Bybee 1985, 2007, Langacker 1987, Tomasello 2003 などを参照)」の観点から日本語の複合動詞における非合成な性質について、使用頻度との相関から検討する。それに基づいて、レキシコンはルールベースのトップダウン型ではなく、実際の用例を一般化することで抽象的なスキーマを作り上げていく用例ベースのボトムアップ型が妥当であると論じる。

従来の合成的なアプローチでは、構成体の全体の意味はその構成要素の意味の総和に還元でき、構成要素から全体の意味が予測できると考えることが多かった。影山 (1993) や由本 (2005, 2008) などの先行研究では複合動詞を語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, LCS) の合成として分析されてきた。例えば、「切り倒す」のような、前項動詞 V1 が後項動詞 V2 の使役事象を達成する手段を表すタイプは[[LCS2] BY [LCS1]]という意味構造を持ち、これが手段型複合動詞のテンプレートだと分析されている。¹

複合動詞に合成的な一面があることは確かである。なぜなら、我々は初めて聞く複合動詞でも、「いじめ殺す」のように、その意味の透明性が高ければ合成的にその意味を問題なく導き出すことができる。本研究は、このような複合動詞の合成性や生産性について、トップダウン的に説明するのではなく、実際の用例からボトムアップ的に形成された[V-殺す]_vのような部分的な空きスロットのある「コンストラクション的イディオム」に意味的に適合する動詞を当てはめることで新しい複合動詞を作り出すと説明でき

る。加えて、複合動詞には V1 と V2 の意味の組み合わせからでは説明できない全体的な意味が存在する。複合動詞の先行研究において、その全体的な性質を指摘したものに石井 (2007) や野田 (2011), 松本 (2011), Matsumoto (2012) などがある。石井 (2007) は要素のくみあわせからは導くことのできない「ひとまとまり性(特殊化された慣習的な、ひとまとまり的な意味)」を認めることができると指摘した。野田 (2011) と松本 (2011), Matsumoto (2012) はコンストラクションの観点から複合動詞の全体的な性質について指摘しているが、これらの先行研究は次節でコンストラクション形態論を導入する際に詳しく述べることにする。

本論文ではまず、2 節にて、コンストラクション形態論という理論的枠組について説明する。その上で、コンストラクション的イディオムという概念に基づいて複合動詞の生産性を説明できることを示す。3 節では複合動詞における全体的な性質について、使用頻度との相関から分析する。4 節ではレキシコンにおける語彙の競合現象を取り上げ、語彙的複合動詞は全体としてレキシコンに登録されている必要があると論じる。最後に 5 節にてまとめを行う。

2. コンストラクション形態論と語彙的複合動詞

2.1 語レベルのコンストラクション

形態論とは語レベルの形式と意味の関係性を研究する言語学の一分野であるが、コンストラクション形態論はその名の通り、コンストラクションという概念が中心的な役割を担っている形態論である。コンストラクションとは意味と形式のペアリングであり、その意味で、文だけではなく、単純語、複雑語、そしてイディオムは、共にコンストラクションとして捉えることができる(Goldberg 1995, Booij 2010)。

表 1 サイズと複雑さの異なる様々なコンストラクションの例(Booij 2010: 15)

	<i>Example</i>
Word	<i>tentacle, gangster, the</i>
Word (partially filled)	<i>post-N, V-ing</i>
Complex word	<i>textbook, drive-in</i>
Idiom (filled)	<i>like a bat out of hell</i>
Idiom (partially filled)	<i>believe <one's> ears/eyes</i>
Ditransitive	Subj V Obj ₁ Obj ₂ (e.g. <i>he baked her a muffin</i>)

従来の形態論は主に二つのアプローチに分けることができる。一つは形態素ベースのアプローチで、ある複雑語(*complex word*)は形態素の合成として分析される(Lieber 1980, 1992, Selkirk 1982, Di Sciullo & Williams 1987 など)。このアプローチの問題点としては、複雑語を構成する形態素がその語以外において存在しない例が多く見られることが挙げられる。例えば、英語の *acceptable, affordable, approachable, believable, doable* のような *V-able* は、他動詞と *-able* という接尾辞が合成したものとして分析できるが、*applicable* における動詞語根 *applic-*は本来基底となる動詞 *apply* とは異なる。さらに、*amenable, ineluctable* などにおいては、基底となる動詞が存在しない(Booij 2013 を参照)。このようなものはいわゆるクランベリー型形態素(*cranberry morpheme*)と呼ばれるもので、複合語の構成要素としては存在するが、単独では用いられないものである。

形態論のもう一つのアプローチは語ベースのアプローチで、既存の語に基づいてその形態を分析するものである(Anderson 1992, Aronoff 2007 など)。Booij (2013) によると、コンストラクション形態論が用いる語ベースのアプローチでは *V-able* の語は既に存在しているものに基づいて次のように分析される。

- | | |
|-------------------|----------------------|
| (1) <i>accept</i> | <i>acceptable,</i> |
| <i>afford</i> | <i>affordable,</i> |
| <i>approach</i> | <i>approachable,</i> |
| <i>believe</i> | <i>believable,</i> |
| <i>doable</i> | <i>doable,</i> |
| <i>apply</i> | <i>applicable</i> |

(1)にある語を左側と右側に分けて分析すると、両者に意味的な対応関係が共通して見られることが分かる。つまり、右の列にある語は左の列の語が表す動作が実現可能であることを共通して表していると分析できる。そして、これらの用例における、形式と意味の対応関係に基づいて一般化することで、以下のようなスキーマを形成することができる(Booij 2013: 256)。

- (2) $[VTR_i -able]_{Aj} \leftrightarrow [[CAN\ BE\ SEM_i-ed]_{PROPERTY}]_j$

(TR は他動詞, SEM は対応する構成要素の意味, \leftrightarrow は形式と意味の対応関係を表す)

スキーマ(2)は既存の *-able* で終わる形容詞を一般化したものであり、それらの予測可能

な一般的性質を表している。V-able はほとんどが他動詞である。従って、コンストラクションの形式はデフォルト的には[VTR_i-able]_{Aj}である。これはあくまでデフォルトであり、少数の例外が許される。しかし、例外となるものも、その意味は他動詞的なものである。例えば、自動詞と他動詞の両方の用法を持つ多義語の *play* と *debate* はスキーマ(2)に埋め込まれると他動詞の用法を選択する。そして、*laughable* と *unlistenable* のような本来自動詞であったものに他動詞の読みを強制する。さらに、*clubbable* のように、[N-able]の場合も、スキーマ(2)によって他動詞の読みが動機付けられる。*amenable*, *ineluctable* のような例は、意味においてはスキーマ(2)と対応しているため、形式的に異なる下位スキーマを形成していると考えることができる。

それだけではなく、スキーマ(2)に基づいて、新たに V-able の形容詞を作り出すプロセスを説明することができる。例えば、最近のインターネットの文化の発展から作り出された *blog* という動詞はスキーマ(2)に基づいて、*blogable* ‘worthy of being blogged’ という新たな形容詞を作り出すことができる。²このようなスキーマ(2)は部分的な空きスロットがある「コンストラクショナルイディオム」である(Jackendoff 2002, Booij 2009, 2010, 2013 を参照)。

2.2 コンストラクショナルイディオムと複合動詞の生産性

語彙的複合動詞は完全に生産的ではないが、中には一部生産性の高いものがある。例えば、近年、中高生がいじめによって自殺するという事件が度々起きており、それによって「いじめ殺す」という複合動詞が新たに作られたと考えられる。この「いじめ殺す」に見られる複合動詞の生産的な一面は、[V-殺す]_v ↔ [対象を V することで死なせる] というコンストラクショナルイディオムの空きスロットに、意味的に適合する動詞を埋め込むことで新しい複合動詞を作り出すと考えることができる。その際、埋め込む動詞が意味的に適合するかどうかを判断するには、ある動詞の表す事象を達成するための「手段」やそれを行う「目的」、さらには「原因」、「結果」、「様態」などの情報を含む「意味フレーム」という意味構造が必要となる(陳 2012, 2015 を参照)。同様に、レキシコンに登録されている「拭き取る」「削り取る」「剥ぎ取る」「切り取る」など様々なく対象を除去する>という意味を表す複合動詞から[V-取る]_v ↔ [対象を V することで除去する] というコンストラクショナルイディオムを作り、その空きスロットに意味的に適合する動詞を埋め込むことで、美容整形などにおいて、レーザーでシミを照射することでそれを除去することを表す「焼き取る」という複合動詞を新たに作ることもできる。[V-殺

す]vや[V-取る]vは比較的高い生産性を有するが、これは[V-殺す]vや[V-取る]vが高いタイプ頻度を持つからである(Baayen 2003, Barðdal 2008, 2011, Hay & Baayen 2005 を参照)。

複合動詞を新しく作る場合は、コンストラクショナル的イディオムを用いるという方法のほかに、影山 (1993), 由本 (2005, 2008) などにおける<V2 BY V1>のような手段型が持つ意味関係のテンプレートに、意味的に適合する動詞を埋め込むことで作る、という可能性もある。しかし、以下に述べる二つの理由によって、抽象的な意味関係のテンプレートではなく、コンストラクショナル的イディオムを用いている可能性が高い。

まず、意味的に成立可能なものでも、それに対応するタイプ頻度の高いコンストラクショナル的イディオムがなければ成立できない、という現象が見られる。例えば、<言葉巧みに言うことで相手を惑わして騙す>という複合事象があるが、「*言い惑わす」「*言い騙す」「*言い欺く」「*言い誑かす」は全て存在しない。これは「~惑わす」「~騙す」「~欺く」「~誑かす」という複合動詞が存在していないからだと考えられる。反対に、<いじめることによって相手を殺す>という複合事象は前述のように「いじめ殺す」で表すことができる。これは「~殺す」が高いタイプ頻度を有するからだと思われる。

また、類義表現において、タイプ頻度の高いものが選択される、という現象がある。前述の「焼き取る」がその例である。<対象を除去する>という意味を表す複合動詞のV2には、「~取る」「~落とす」「~消す」などがある。「~取る」「~落とす」「~消す」は完全に同じ意味を持っているわけではなく、意味的な棲み分けが見られる。まず、「拭き取る」や「拭き取る」のように、「~取る」は<対象を除去する>という意味を表しているが、その背景的な情報として、除去した対象が動作主のコントロール可能な所に留まる必要がある。そのため、除去した対象が動作主のコントロール下にはないものは「*はたき取る」「*払い取る」のように成立しない。それに対し、「~落とす」は「はたき落とす」や「払い落とす」のように、<何かの表面に付着している対象を除去する>という意味を表すが、背景的な情報として、除去した対象は通常下方へ落下する、という情報が含まれる。それによって、除去した対象が通常下方へ移動しない場合は、「*拭き落とす」「*拭き落とす」のように容認出来ない。そして、「~消す」は「吹き消す」「踏み消す」のように、火などを<消滅させる>ことを表している。そのため、対象が消失しない場合は「*拭き消す」「*拭き消す」「*はたき消す」「*払い消す」のように成立できない。<レーザーでシミを照射して熱することでそれを除去する>という複合事象の場合、除去される対象であるシミは消失するため、本来ならば「~消す」を用いて表現することが可能であるはずだが、『Web データに基づく複合動詞用例データベース(以下

複合動詞データベース)』³を見ると、「*焼き消す」という複合動詞は存在していない。その代わりに「焼き取る」と「焼き落とす」が用いられている。これは、「～取る」「～落とす」「～消す」のタイプ頻度の違いによるものだと考えられる。『複合動詞データベース』において、＜対象を除去する＞を表すことができる「～取る」のタイプ頻度は29、「～落とす」は18あるのに対し、「～消す」は6しかない。

表2 <除去する>を表す「～取る」「～落とす」「～消す」のタイプ頻度

<除去する> を表す V2	複合動詞の実例
「～取る」	拭き取る, 拭い取る, 掃き取る, 焼き取る, 切り取る, 削り取る, そぎ取る, えぐり取る, 折り取る, 破り取る, ちぎり取る, 剥がし取る, 剥ぎ取る, 抜き取る, むしり取る, もぎ取る, 摘み取る, こし取る, こすり取る, 絞り取る, すくい取る, 擦り取る, 抱き取る, 舐め取る, 掘り取る, 巻き取る, 掻き取る, 絡み取る, 移し取る 計 29 語
「～落とす」	洗い落とす, 掻き落とす, 刈り落とす, 切り落とす, 削り落とす, こすり落とす, すり落とす, 削ぎ落とす, 剃り落とす, 叩き落とす, 流し落とす, 剥ぎ落とす, 弾き落とす, はたき落とす, 払い落とす, 吹き落とす, 磨き落とす, 焼き落とす 計 18 語
「～消す」	打ち消す, 掻き消す, 吹き消す, 踏み消す, 塗り消す, もみ消す 計 6 語

このように、タイプ頻度の低い「～消す」は生産的なコンストラクション的イディオムを形成していないと考えられる。そのため、本来「～取る」が要求する＜除去した対象が動作主のコントロール可能な所に留まる必要がある＞という背景的な情報と矛盾が生じるにも関わらず、「*焼き消す」ではなく「焼き取る」を用いるのである。加えて、「焼き取る」のトークン頻度が145で、「焼き落とす」の121より若干高いことも、「～取る」と「～落とす」のタイプ頻度の違いを反映している。

2.3 コンストラクション的イディオムと拘束意味

コンストラクション的イディオムにおける固定された要素は単独で使用されるとき

には見られない意味を持つ場合がある。このような複合語に埋め込まれた形でしか見られない意味を「拘束意味(bound meaning)」という。例えば、オランダ語の *reuse*(*reus* ‘giant’ という語に linking element としての *-e* がついたもの)は複合語の前項として、名詞や形容詞と結合することで、単独で使われる際には見られない‘great’と‘very’という意味を持つ(Booij 2013: 259)。

(3) a. *reuse*-N

reuse-idee ‘great idea’

reuse-kerel ‘great guy’

reuse-mop ‘great joke’

reuse-plan ‘great plan’

b. *reuse*-A

reuse-aardig ‘very kind’

reuse-leuk ‘very nice’

reuse-gemeen ‘very nasty’

複合動詞にもこのような拘束意味を持つコンストラクショナル的イディオムが見られる。例えば、「見落とす」「聞き落とす」における V2「落とす」は本動詞には見られない<情報を捉えることに失敗する>という意味を持つ(cf. 「重要な問題を{見落とした/*落とした}」)。同様に、「焼き上げる」「書き上げる」などにおける<あるものを完成させる>という意味や「追い上げる」における<対象に接近する>という意味を表す V2「上げる」, 「飛び出す」「流れ出す」などにおける<障害と感じられるような境界を越えて外側に出る>意味を持つ V2「出す」(松本 2009 を参照)などは、全て単独動詞では見られない拘束意味である。

拘束意味を持つ V2 は本来の単独動詞としての機能を失い、V1 を修飾するという補助的な機能になっている場合が多く見られる。例えば、「澄み切る」「困り切る」などにおける<V1 の表す状態が限界に達している>という意味を持つ V2「切る」や、「生き抜く」「走り抜く」などにおける<V1 の表す事象を最後まで行う>という意味の V2「抜く」などは、「V1 て V2」や「V1 ながら V2」というふうには言い換えられず、V2 は V1 を補助的に修飾しているものである。このようなものは「生き抜く」や「走り抜く」などのような実際の用例からボトムアップ的に抽出した[V-抜く]_v というようなコンストラクショナル的イディオムとして捉えることができる。

反対に、V2ではなく、V1が本来の単独動詞としての意味を希薄化させ、接頭辞的になっているものもある。「打ち震える」「打ち続く」などにおけるV1「打つ」や「取り囲む」「取り調べる」などにおけるV1「取る」は本来の物理的な動作としての意味がなくなり、V2の意味を強めるに留まっているという点、そして、V1という決まった位置にしか現れないという点において、接頭辞的である。接頭辞「的」だというのは、これらは接辞と違って、ある語彙素と結びついている拘束形態素だからである(Booij 2010 や 史 2014 における“affixoid”という概念についても参照)。V1の「打つ」や「取る」などは、部分的な生産性しか持たない。V1を強調する意味で「*打ち荒れる」「*打ち乱れる」「*取り荒らす」「*取り汚す」などは存在しない。本研究ではこのようなV1の意味が希薄化したものを、V1にV2を組み合わせる、というような合成的なアプローチではなく、用例に基づいてボトムアップ的に [打ち-V]_v や [取り-V]_v というコンストラクション的イディオムが形成されると考えることで、その限定的な生産性を説明できる。

また、コンストラクション的イディオムの中には、固定されている要素が拘束形態素である [繰り-V]_v, [V-入る]_v, [V-込む]_v がある。これらについては3節で検討する。

2.4 階層的レキシコン

コンストラクション形態論においては、スキーマとそのスキーマの具現化の関係性はデフォルト継承のメカニズムを用いることで、図1のように、階層的なレキシコンとして表すことができる。

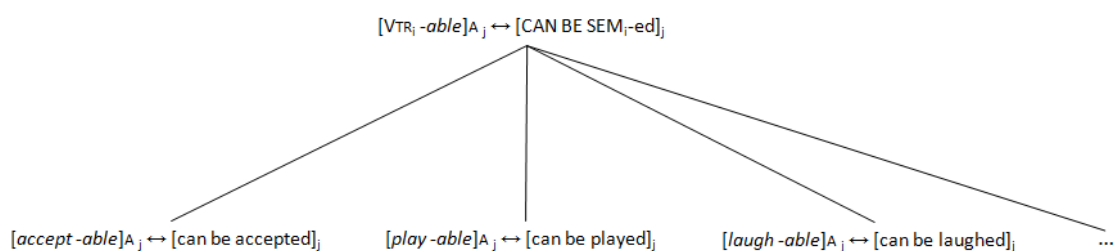


図1 階層的レキシコンにおける V-able

デフォルト継承とは、ある語の全ての予測可能な性質は上位のスキーマ(ツリーの節点)から受け継ぐ、というものである(Booij 2012 を参照)。このデフォルト継承には二つの考え方があり、一つは不完全語彙項目記載理論(impooverished entry theory)で、これはある語彙項目の全ての予測可能な性質はその語彙項目の性質として含まず、それを支配しているスキーマや制約によって特定され、語彙項目はその上位スキーマから継承という

形でその性質を受け継ぐ、というものである。もう一つの考え方は完全語彙項目記載理論(full entry theory)で、語彙項目は全ての性質がそれ自身のものであるとして特定されているというものである(Jackendoff 1975 も参照)。そして、継承は非独立(予測可能)な情報がどれほどあるのかを計算するためのメカニズムであるという。コンストラクション形態論においては後者の完全語彙項目記載理論の考え方を取る。なぜなら、抽象的なスキーマは実際に登録された複合語に基づいて形成されるからである。加えて、抽象的なスキーマを形成すると元々登録されてあった複合語の性質が消去されることを証明するものは何もない(Booij 2010 を参照)。

デフォルト継承はあくまでデフォルトの場合の継承であり、それと異なる特異な性質を持つ下位ケースの存在を拒むものではない。例えば、V-able の形容詞の性質は基本的にスキーマ(2)によって捉えられるが、そのほかに、1) *agreeable* のように、他動詞ではないが前置詞を伴って対象を要求する *agree* から派生したもの、2) *applicable* のような本来の動詞の形 *apply* ではない形を含むもの、3) *clubbable* のように、元になっているのが名詞であるもの、さらには 4) *amenable*, *ineluctable* などのように、ベースとなる語が存在しないものもある。これらの例はそれぞれ一つの下位スキーマを形成しており、一つの個別語レベルのコンストラクションと見なすことができる(Croft 2003, 2012 の verb-specific construction を参照)。

このように、存在する-able 形容詞とそのスキーマの両方を特定することで、ルール／リストの誤謬(Rule/List Fallacy)を回避することができる。

ルール／リストの誤謬：

ルール(文法規則)によって予測できるものはリスト(レキシコンに登録)する必要がないという間違った仮定 (Langacker 1987: 29, 42)⁴

コンストラクション形態論において、リストすることは言語的に慣習化されたものを特定することであり、抽象的なスキーマは文法の生成能力を表している。用法基盤モデルの考え方では、言語話者は既に学習した個々の複合語の例から抽象化されたスキーマを抽出するのである。

ここで一つ問題になるのが、経済性という視点から考えると、どうせ全てがレキシコンに登録されるのなら、なぜスキーマの存在が必要なのか、ということである。スキーマの必要性を支持する証拠の一つとして、スキーマに基づく生産的な語形成のプロセス

を説明できるという点が挙げられる。スキーマは単に既存の語の一般化だけでなく、生産的な語形成に用いることができる(例: *blogable, skypable*)。また、スキーマの心理的実在性は実験で子供が複数の複合語から抽象的なパターンを発見し生産的に使用できることによっても証明されている(Mos 2010)。関連して、この問題点について、Jackendoff (2011b) はたとえ全てが登録されるにしても、スキーマのように一般化を行うことはある意味経済的であり、これはレキシコンのエントロピー、またはレキシコンの内部的な整合性と関連がある。そして、この問題を解決することで人間の記憶についてもより深い理解が得られるだろうと述べている。つまり、レキシコンに登録されたとしても、実際にそれを運用するに際してはある程度整理された形のほうが効率がいいからだと考えられる。Booij (2012) はこの問題をスキーマによる「動機づけ(motivation)」として説明している。スキーマの動機づけとは、全ての語彙項目はそれを支配しているスキーマによって、その形式と意味の結びつきが動機づけられているというものである。これによって従来恣意的なものとしてきた形式と意味の結びつきは、スキーマの動機づけによって予測可能なものとなり、記憶の負担を軽減することになるという。このように、Booij (2012) では継承という概念を動機づけという概念に捉え直すことで、完全語彙項目記載理論と継承という二つの概念の間の矛盾を解消しようとしている。

階層的レキシコンは複合動詞の分析にも取り入れることができる。松本 (2011) や Matsumoto (2012) は日本語複合動詞をコンストラクション形態論の観点から分析し、複層的な制約が必要だとして、主語一致のスーパー(上位)スキーマと意味関係のスキーマを中心に、日本語の語彙的複合動詞を階層的スキーマネットワークで示している。

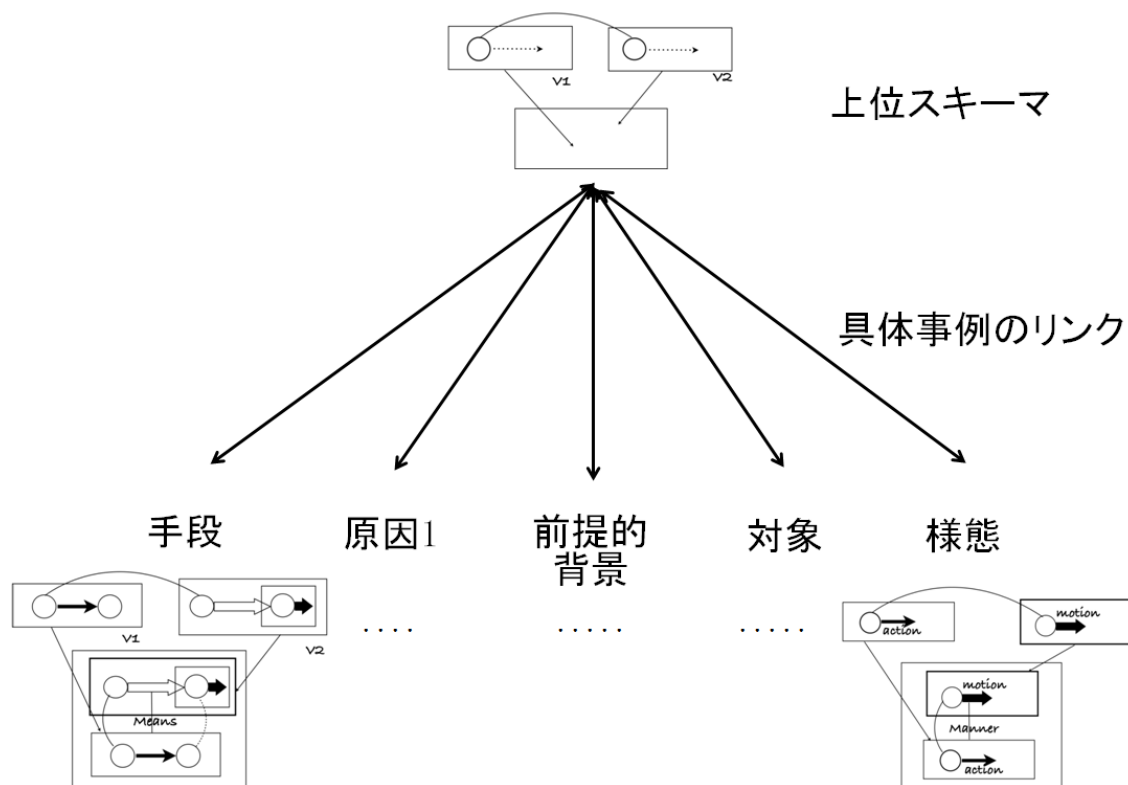


図2 松本 (2011) における日本語語彙的複合動詞の階層的スキーマネットワーク

松本 (2011) によると、複合動詞は、その構成要素のみから予測されない意味を持つ。複合動詞の V1 と V2 は原因—結果、手段—目的などの特定の意味関係にあり、複合動詞の意味にはこのような意味関係を表す意味が含まれている。例えば、手段型の動詞は <V2 BY V1> という意味を表すが、BY のような意味関係は、特定の構成要素と結びついておらず、複合動詞というコンストラクションの意味である。そして、日本語の語彙的複合動詞で認可される主要イベントスキーマのスーパースキーマ(一般的な上位スキーマ)として、主語一致のスキーマが存在する。すべての主語一致型スキーマが複合動詞に認められるわけではないため、下位スキーマのリストが必要であり、すべての非派生スキーマは主語一致型であるため、一般化を捉えるために上位スキーマが必要であるという。

また、野田 (2011) は分析可能性の高い複合動詞を対象として、個々の複合動詞の意味を分析し、そこからボトムアップ的に抽出した(現代日本語において確立していると考えられる)13 の構文的意味を提示している。例えば、「駆け上がる」「飛び下りる」「走り回る」などには共通した意味特徴が見られ、これらの複合動詞からボトムアップ的に <移動主体が、ある動き V1 を伴い、ある移動 V2 を実現する> という構文的意味を抽

出すことができ、「打ち上げる」「切り倒す」「叩き壊す」などからはく使役行為者が、ある行為 V1 により対象に働きかけ、その結果として対象にある使役行為 V2 を実現させる>という構文的意味を抽出できる、というふうに分析している。

このように、コンストラクションを用いた先行研究においては、具体例から一般化された抽象的なスキーマを中心に検討しているが、本研究は慣習化の影響を考慮し、構成要素から予測できない性質を持つ具体例の一部(「取り締まる」「立ち会う」「引き出す」など)を個別動詞レベルのコンストラクションと見なす必要があると主張する(Boas 2003, Croft 2003, 2012 を参照)。このような構成要素の合成という観点からでは説明できない複合動詞の全体的な性質については次節で詳しく検討する。

また、個別動詞レベルのコンストラクションの必要性を示す一例として、前述のクランベリー型形態素、すなわち拘束形態素の存在が挙げられる。例えば、(4)にある複合動詞は「おびき出す」や「褒めそやす」などのように、下線部の動詞が現代日本語では単独で使用されないものや、「引っ張る」や「ひん曲げる」、「引っこ抜く」などのように、V1 が本動詞と思われる「引く」の連用形ではないばかりか、それが単独で使われるときには見られない語形である。

(4) V1 が拘束形態素：

駆けずり回る、思し召す、おびき出す、おびき寄せる、いがみ合う、のけ反る、ひっくり返る、ひっくり返す、ぶりかえす、へし折る、捲し立てる、むしゃぶりつく、滅入る、めり込む、せせら笑う、ひっかかる、ひっかく、引っ張る、ひん曲げる、ひん曲がる、ひん剥く、引っこ抜く、揺さぶる、揺すぶる、寄越す、あざ笑う、かいつまむ など

V2 が拘束形態素：

遊び呆ける、言いそびれる、言いふらす、言いつかる、仰せつかる、攻めあぐむ、攻めあぐねる、老いぼれる、慌てふためく、黙りこくる、ぶちまける、褒めそやす、見せびらかす、打ち込む、駆け込む、食い入る、押し入る など

斎藤 (1992) では V1 が「引く」の複合動詞について分析しており、「引く」が複合動詞の V1 に埋め込まれた際の具体的な形式が「ひき」、「ひっ」、「ひん」、「ひっこ」という四種類があることについて、形態素を記述の基礎とする従来 of 形態論の立場から、これらの形式をどのように位置付けて扱うべきかが大きな問題点として残ると述べている。

(4)にある複合動詞の拘束形態素は単独では存在しないため、それ自体を語彙項目とは見なせない。また、「慌てふためく」や「黙りこくる」、「立ちはだかる」などにおいて、「ふためく」「こくる」「はだかる」などのような構成要素はこの特定の複合動詞にだけ見られるものである。このように、「～入る」⁵「～込む」などのようなタイプ頻度の高い一部のものを除いて、拘束形態素の多くは結合できる動詞が極めて限られており、生産性がない。加えて、「～込む」は『複合動詞データベース』で計 253 語もあり、日本語語彙的複合動詞の中で最もタイプ頻度の高い V2 であるが、拘束形態素である。「～込む」のようなものをどう扱うのか、ということも問題となる。

コンストラクション形態論の観点から見ると、複合動詞はそれ自体が一つのコンストラクションとしてレキシコンに登録される。「おびく」や「そやす」など、かつて存在していた語は現代日本語では単独で使われなくなったが、「おびき出す」や「褒めそやす」などのように、複合動詞に埋め込まれた形で現代に生き残ったと考えることができる。同じように、「ひっ」、「ひん」、「ひっこ」という接頭辞が存在すると考えるよりも、「引張る」や「ひん剥く」、「引こ抜く」などが[V1-V2]_vとしてそのままレキシコンに登録されていると考えるほうが妥当である。ひとまとまりとしてレキシコンに登録されていることによって、「引張る」や「ひん曲げる」、「引こ抜く」の全体的な意味から、下線部と本動詞の「引く」が関連付けられる。⁶ V2「込む」や「入る」などのような高いタイプ頻度があるものに関しては、[V-込む]_vや[V-入る]_vのようなコンストラクション的イディオムとしてレキシコンに登録されていると考えることができる。

複合語はひとまとまりとしてレキシコンに登録する必要がある、というのは従来からある考え方である。例えば、Chomsky (1970) や Halle (1973) などにおいても、語彙的な語形成過程によって形成された output は、何らかの形で辞書(レキシコン)に登録されると考えられている。影山 (1993: 355) においても、語彙部門における語形成は活発なものから不活発なものまで様々な段階が存在するが、最も活発なものでも、その派生結果は辞書に登録されていると述べている。この点では、これらの研究も本質的にコンストラクション形態論と共通するものである。

Langacker (1987: 57) などが主張しているように、コンストラクションの考え方では、言語は「慣習的な言語的単位の構造化された目録(a structured inventory of conventional linguistic units)」であるため、個別の動詞も抽象的なスキーマも同じコンストラクションと認められる。Langacker (2008: 67) や Croft (2001: 17) が述べているように、レキシコンとシンタクスは連続的なものである(“the syntax-lexicon continuum”)。コンストラクシ

ョンという共通の概念として見なすことで、個別動詞レベルのコンストラクションとコンストラクション的イディオム、そしてさらに抽象的な意味関係のコンストラクションや主語一致のコンストラクションとの連続性を捉えることができるのである。

3. 複合動詞の全体的な性質

先に述べたように、従来の日本語複合動詞の形成は主に構成要素である V1 と V2 の語彙概念構造(LCS)の合成として分析されてきた(影山 1996, 由本 2005, 2008 など)。しかし、これらの合成的な研究は言語変化及び慣習化を考慮していないという問題点が存在する。複合動詞には、「落ち着く」などのように、合成的に全体の意味を導き出すことができない例が多くあり、ゲシュタルト的な複合体として捉える必要がある(石井 2007, 野田 2007 を参照)。複合語はそれが非合成的な性質を有する場合や、高頻度で使用されるときには、自動化(automation)によって、一つのまとまり(chunk)として記憶されると考えられる(Bybee 2006 などを参照)。

このようなまとまりを示す性質は様々な面において観察されるが、以下においては「合成性 (compositionality)」と「分析性 (analyzability)」という二つの概念に基づいて検討していく。

Langacker (1987) が述べているように、合成性と分析性という二つの概念は区別して考える必要がある。

Compositionality refers to the degree of regularity in the assembly of a composite structure out of smaller components. It is to be distinguished from analyzability, which pertains instead to the extent to which speakers are cognizant (at some level of processing) of the contribution that individual component structures make to the composite whole. (Langacker 1987: 457)

「取り締まる」のようなものは V1 と V2 の意味からアルゴリズム的に構築できるものではないため、合成性はなく、全体の意味から V1 と V2 の意味を理解するのも困難であるため、分析性も失われている。一方、「(気持ちを)押し殺す」などは全体の意味から構成要素の意味を理解することができるため、分析的ではある。しかし、「??虫を押し殺す」の容認度が低いことから分かるように、「押し殺す」は単に V1 と V2 の意味を合成したものではない。したがって、「押し殺す」は、分析性はあるが合成性のない例だと言える。分析性があるものの中には「({事件/煙草} を)もみ消す」のように合成

的なものも、「({気持ち/??虫} を)押し殺す」のような非合成的なものもある。それに対し、分析性がないものは必然的に合成性がないということになる。

以下では、3.1 にて合成性と分析性を失っている例、3.2 で分析的だが合成性を失っている例を取りあげて検討し、3.3 では特定の文脈が語に定着するという語用論的な現象を見ていく。

3.1 合成性と分析性を失っている例

複合動詞には「取り締まる」や「もてなす」のように、全体の意味を V1 と V2 の意味に還元できないものが少なからず存在している。このような例は合成的に全体の意味を導き出すことができないだけでなく、分析性も失っており、[V1-V2]_v 全体としてレキシコンに登録されていると考えなければならない。

分析的でないものには二種類あり、一つは(5)のように構成要素の一部がどういう意味的な役割を担っているのか認識できないため、分析できないもので、もう一つは(6)のように V1, V2 共にどういう意味的な役割を担っているのか認識できないものである。

(5) 下線部の構成要素がどういう意味的な役割を担っているのか認識できない例⁷

あふれかえる, ありつく, ありふれる, 慌てふためく, 言いつかる, 言い張る,
いがみ合う, 居直る, 入り組む, 入れ上げる, 打ち沈む, 打ち解ける, 打ち震える,
追い上げる, 追いかける, 老いぼれる, 押し黙る, 落ち合う, 落ちぶれる,
落ち延びる, 思い切る, 買い被る, かけ離れる, 掛け持つ, 食い止める,
存じ上げる, 通りすぎる, 練り歩く, 引っかかる, 引っかける, 負け越す,
待ち侘びる, 酔いしれる, 酔っ払う, 隠しおおせる, かなぐり捨てる, 出くわす,
にじり寄る, のけ反る, のし上がる, のしかかる, まかり通る, 駆り立てる,
決めつける, 切り上げる, 切り返す, 食い違ふ, 差し押さえる, 差し控える,
詰めかける, 出かける, 問い合わせる, 取り掛かる, 取り囲む, 取り交わす,
取り決める, 取り組む, 取り消す, 取り壊す, 取り下げる, 取り仕切る,
取り調べる, 取り立てる, 取り繕う, 取り潰す, 取り巻く, 取り乱す, 成り済ます,
ひっくり返る, ひっくり返す, 開き直る, ひん剥く, 吹っ切れる, ぶちまける,
踏みにじる, ぶりかえす, へし折る, 褒めそやす, 舞い戻る, まくし立てる,
見合う, 見切る, 見せびらかす, 見積もる, 見舞う, むしゃぶりつく, 滅入る,
めり込む, 持て囃す, やっつける, やり過ごす など

(6) V1, V2 共にどういう意味的な役割を担っているのか認識できない例

かっぱらう, 引っ越す, 取り締まる, 押しかける, 折り入る, 食い下がる, 取り持つ, もてなす, 割り切る, 引き分ける, 立て込む, 振る舞う, 見限る, 見立てる, やり込める など

コンストラクショナルな考え方では, 複雑語でもそれ自体が構成要素から予測不可能な性質を持つ場合や, 一定以上の使用頻度があるときには一つのコンストラクションとしてレキシコンに登録される。

3.2 分析的だが合成性を失っている例

分析的でない例のほかにも, 分析的だが合成性を失っている例が存在する。例えば, 「立ち会う」「落ち着く」などがそうである。これらの複合動詞の全体の意味は後述するように, 構成要素の V1 と V2 からアルゴリズム的に導き出すことはできないが, 全体の意味から V1 と V2 の果たす意味的な役割を理解することは可能である(複合語における合成性と分析性については Coulson 2001: 159-161 を参照)。「立ち会う」とは, 誰かが何かを行う特別な場に「立ち」それを見届けることである。そして, その場には他の誰かがいることが前提となっており, その意味で誰かと「会う」のだと理解される。同じように, 「落ち着く」は<精神状態が安定する>という意味だが, 何か「落ちて」地面に「着く」と, 最終的には動きが止まり安定することからメタファー的にその意味を理解することができる(cf. Lindstromberg 2010: Ch. 16)。

従来, 合成的ではない例としては「取り締まる」のような分析的ではない例を挙げるが多かったが, 本研究では, 「立ち会う」「落ち着く」「引き立てる」「押し殺す」などのような分析的な例も合成的でない例だと考える。このような例は(7)のように多く存在しているが, 「引き立てる」や「押し殺す」のように抽象的な意味でのみ用いられるものと, 「立ち会う」や「落ち着く」のように, 特定の場面でのみ用いられるものに分けられる。

(7) 分析的だが合成的でない例(数字は用例数, 網掛けは平均より低いものを表す)

a. 抽象的な意味でのみ用いられる例(計 50 語)

(*ダーツを)当てつける 438, (??パネルが枠に)当てはまる 2148,
(*コンビニに)歩み寄る 1651, (*頭を)打ち切る 2472, (*照明を)打ち消す 1859,

(??壁の隙間を)埋め合わせる 1327, (*虫を)押し殺す 1538, (??台車を)押し進める 1415,
 (*排水管を)押し通す 1528, (*穴に)落ち入る 1120, (*水滴が)落ちこぼれる 1274,
 (*穴に)落ち込む 3279, (*地面に)落ち着く 3063, (*石を)かいつまむ 495,
 (*警察犬が犯人に飛びついて)食い下がる 1337, (*桜が)返り咲く 1396,
 (*糸を)繰り広げる 1729, (*稲を)こき下ろす 1479, (*頸動脈を)締め切る 2589,
 (*壁に)擦り寄る 1501, (*棒を)出し抜く 1508, (*シートを)畳み掛ける 1133,
 (*棒を)立ち上げる 3143, (*棒を)立て替える 1925, (*隙間を綿で)突き詰める 1321,
 (*魚を槍で)突き止める 2039, (*レンガを)積み立てる 2225, (*心臓を)貫き通す 1541,
 (??鏡を)照らし合わせる 1528, (*積み木を)取り崩す 2245, (*ベッドで)寝返る 1683,
 (*ロープを)張り切る 1731, (*倒木を)引き起こす 2860, (??荷物を)引き出す 2742,
 (*倒れた柱を)引き立てる 1781, (*縄をぐいっと)引き取る 3540, (*息を)ふっかける 1541,
 (*縄を)踏み切る 2554, (*バットを)振り込む 3384, (*タオルを)振り絞る 1457,
 (*二人は暫くお互いを)見合う 2023, (*対面の席に座った二人は無言で)向き合う 2789,
 (*荷物が)持ち上がる 1803, (*タオルを)持ちかける 1841, (??土を)盛り上げる 2395,
 (*土を)盛り返す 1442, (*二人は川を)渡り合う 1513, (??クルミを)割り出す 2042

b. 特定の場面でのみ用いられる例(計 47 語)

(*目標を)言い立てる 1420, (*条件を)言いつける 438, (*役所に文句を)言い寄る 1522,
 (*文句を)言い渡す 2014, (*一分間ベンチに)居座る 1805, (*崖から)落ち合う 1617,
 (*家族の事を)思い込む 3303, (*答えを)思い知る 1870, (*内容を)思い詰める 1407,
 (*毎日バスに乗って自宅の前に)降り立つ 1744, (*胃に)食い込む 2344,
 (*エアコンをリビングに)買い付ける 1971, (*野良犬が)嘔み合う 2405,
 (*槍を)こき使う 1340, (*目薬を一滴)差し入れる 528, (??傘を)差し向ける 1517,
 (*偶然友人に)立ち会う 2076, (*壁際に)立ち寄る 1993,
 (*買ったばかりのアイスを)食べ歩く 1467, (*腕を)使い回す 1664, (*条件が)付き合う 7408,
 (*妻をレストランに)連れ込む 2044, (*飼い犬と)連れ添う 1380, (*被害に)出会う 5011,
 (*忘れ物をしたため、家を)出直す 978, (*道に)出回る 2869, (*良い方向に)出向く 2574,
 (*忘れ物を取りに部屋に)出戻る 1936, (*テーブルの上のリモコンを)取り寄せる 2018,
 (*高校生に)成り上がる 1336, (*親に)似合う 9115, (*布団に)寝込む 1629,
 (*ベッドを)寝違える 1498, (*自転車)を)乗っ取る 2393,
 (*買ったばかりのジュースを)飲み歩く 1351, (*扉を)引き合わせる 1515,
 (*縄を)引き渡す 2303, (*バットを)振り当てる 1056, (*塩を)振り付ける 556,

(*各地の文化に)触れ回る 1184, (*亡くなった父を)葬り去る 1388, (*太陽を)見かける 2544,
(*お礼を)申し込む 5039, (*不満を)持ち寄る 1687, (*名前を)呼びかける 3246,
(??犬を家に)呼び込む 2137, (*お皿を)割り込む 1588

(7a)の例のように、抽象的な意味でしか用いられないという、複合動詞化に伴って起こる「意味の抽象化」とでも言うべき現象には程度性が見られる。例えば、『複合動詞データベース』を検索すると、「洗い出す」や「突き動かす」などは、複合動詞化されると、抽象的な意味で使用される傾向が高いが、まだ具体的な意味でも使われている(「洗い出す」は目的語を取る 950 例の中で具体的な目的語は「石」や「汚れ」などの 21 例のみ;「突き動かす」は 838 例中、「腰」や「粒子」など 27 例)。一方、「{味/*倒れた柱}を引き立てる」や「{気持ち/??虫}を押し殺す」などにおいては、複合動詞化されると、もはや抽象的な意味でしか使われなくなる。

次に、(7b)のような例は、抽象的な意味でのみ使われるという制限を持たないが、ある特定の意味以外の解釈は成立しない。「言い渡す」を例に説明すると、もしこの複合動詞が合成的に形成されたものだとしたら、「*太郎は{情報/秘密/予定}を友人に言い渡した」というように言えてもいいはずなのに、「言い渡す」はもっぱら判決やリストラ、処分などのような公的な処置の場面で用いられ、V1 と V2 から合成可能な他の意味は成立しない。同様に、「*道端で偶然友人に立ち会った」や「*忘れ物を取りに家に出戻った」とは言えず、これらの複合動詞は特定の場面(フレーム, Fillmore 1982 などを参照)と結びついている。

(7a)にあるものは本来具体的なことにも抽象的なことにも使えるという、程度性があるものであるのに対し、(7b)のものはどちらかと言えば最初からある特定の複合事象を表すために二つの動詞を選んで複合動詞を作ったと思われる。例えば、「言い寄る」は初めから求愛行為を表すために、求愛行為を最もよく表すことができる、何か甘い言葉を「言う」ことと、想っている人のそばに「寄る」ということから「言う」と「寄る」を選んで複合動詞化したと思われる。

このように、本来ならば合成可能な意味が成立しない、という特異な性質も合成的なアプローチからは説明できず、複合動詞(または複合語)が全体として持っている性質だと考える必要がある。(7)のような例は個別動詞レベルのコンストラクションとして考えられる。⁸

複合動詞に見られるこのような非合成的な性質は、図 3 が示すように、それを作り出

す産出側とそれを受け取って解釈する理解側のずれによって説明できる。

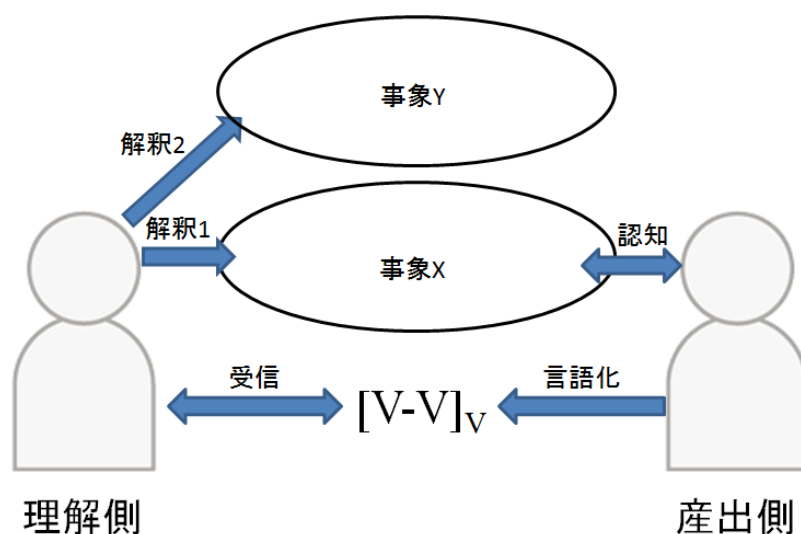


図3 複合動詞における産出と理解のずれ

複合動詞の産出と理解において、産出側はある事象 X を認知して、複合動詞のスキーマに合致するように二つの動詞を選んで言語化する(あるいは既に産出者のメンタルレキシコンに事象 X に対応する複合動詞がある場合はその複合動詞をそのまま用いる)。理解側はその複合動詞を受信し、自身のメンタルレキシコンから検索し、もし既に登録されているものであれば問題なく産出側が伝達しようとした事象 X を復元できる。しかし、複合動詞の場合は単純語と違って、受信者のメンタルレキシコンにその複合動詞が存在していない場合でも、構成要素となる動詞が語彙項目として既にレキシコンに登録されている場合には、構成要素の二つの動詞の意味とその意味関係に基づいて、全体の意味を合成的に解釈することが可能である(例:「祈り殺す」)。その場合、理解側は必ずしも元の事象 X を復元できるとは限らず、ほかの合成可能な解釈によって、産出者の本来の伝達意図とは異なる事象 Y を誤って復元する可能性がある。これは複合動詞に限った話ではなく、複合語全般やイディオムにも言えることである。

さらに、用法基盤モデルの観点から考えると、言語社会の共通認識としてこのような意味変化が成立しているのは Bybee (2007, 2013) が述べているように、高い使用頻度によって支えられていると考えられる。「引き立てる」全 1781 例や「押し通す」全 1528 例などは使用頻度が高く、その特異な性質が言語社会のメンバーに共有されていると考えられる。対して、「引き破る」全 323 例や「押し沈める」全 144 例などのような低頻度のものにはこのような意味変化が見られない。これは、使用頻度が低いものと言語

社会の共通認識として何らかの特異な性質を保持することはできないからだと思われる。

『複合動詞データベース』における全ての複合動詞の用例数の平均値は 1012.73 であるのに対し、(7)の複合動詞の用例数の平均は 2081 である。また、複合動詞全 3770 語を頻度順に並べて、頻度の高いグループと頻度の低いグループ(各グループ 1885 語)に分けると、高頻度グループにおける非合成的な複合動詞は 91 あるのに対し、低頻度のグループのほうは 6 語しかなく、非合成的な複合動詞は有意に高頻度であることが分かった($X^2(2) = 76.452, p < .001$)。

このことから、合成可能な意味が成立していない非合成的な例は、高い使用頻度によって支えられていることが伺える。(7)の中には、全ての複合動詞の平均値より下回っているものがあるが、その中の「当てつける」「言いつける」「差し入れる」「振り付ける」は、それぞれに対応する非常に確立された[V-V]_N(「当てつけ」「言いつけ」「差し入れ」「振り付け」)の意味によって支えられていると思われる。「出直す」もやや平均値より低く、「出直し」という対応する[V-V]_Nを持っているが、「出直し」が「出直す」より確立されているとは言いがたい。また、「かいつまむ」は『複合動詞データベース』では用例数が少なく、対応する[V-V]_Nも持たないが、これは『複合動詞データベース』が動詞の終止形と連用形を中心に収録しているためだと思われる。『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』で検索してみると「かいつまむ」は 83 例あったが、全て「かいつまんで」というテ形で用いられていた。⁹しかし、『複合動詞データベース』には「かいつまんで」という形が数例しか無く、ほとんどが「かいつまむ」という、終止形の例である。ただし、テ形という特殊語形の収録漏れを加味しても「かいつまむ」の用例数は平均より下回ると思われるため、「出直す」と併せて、さらなる考察が必要である。

このように、使用頻度の観点から見ると、「出直す」と「かいつまむ」という例外のように思われるものもあるが、全体の傾向としては非合成的なグループのほうが高頻度が高いことがはっきり現れている。したがって、複合動詞は少なくとも全体的な性質を有するものは、[V1-V2]_vとしてレキシコンに登録されている必要があり、その使用頻度についての情報も保存されていると考えるのが妥当である。¹⁰

3.3 特定のコンテキストの定着

これは、語用論の面において見られる現象だが、例えば、「押し倒す」のような例は、本来は単なる物理的な動作を表すものだったが、性的なコンテキストでの使用頻度が高

いため(『複合動詞データベース』において、目的語を取る 250 例中 184 例 [73.6%] が性的な意味を持つ)、「私はいきなり彼に押し倒された」のように、特定のコンテキストがない場合でも性的な意味を喚起し得る。「押し倒す」のこのような性的なコンテキストでの使用は特に若い世代に多く見られ、次のように用いられている。

- (8) 女性だって、男性のちょっとした仕草やシチュエーションにときめいて、「この人なら押し倒されてもいい!」と思うことはあります。

(<http://news.mynavi.jp/articles/2014/06/05/moe2/>)

- (9) 男性が思わず彼女を押し倒したくなった誘い方を聞きました。

(<http://woman.mynavi.jp/article/140427-48/>)

Bybee (2010) が述べているように、ある言語表現は特定のコンテキストにおいて頻繁に使用されることで、コンテキストの意味がその言語表現と結びつくことがある。

[F]or semantic or pragmatic shifts, repetition within certain contexts leads to new associations of the expression with a meaning ... (Bybee 2010: 50)

「押し倒す」のようなものはまだ合成的な意味を維持しており、何かを押すことでそれを倒すという動作であれば場面を問わず使用することができる。この点において、「押し倒す」は「突き動かす」や「洗い出す」などに近いが、「突き動かす」や「洗い出す」などは具体的な意味に対し抽象的な意味が優勢であるのに対し、「押し倒す」は多くの場面の中で、ある特定な場面において頻繁に用いられるものだと思われる。「押し倒す」は特定の場面との結びつきという意味では(7b)の「言い寄る」と似ている。しかし、前述したように、「言い寄る」などは最初からある特定の場面を表すために作られたものだと思われるのに対し、「押し倒す」は単に<何かを押すことで倒す>という物理的な動作を表すだけのもので、特定の場面を表すために作られたものではないと思われる。また、「言い寄る」などは特定の場面と結びついており、意味の変化が生じている。それに対し、「押し倒す」は特定の場面に限定されるというほどの強い制限はなく、特にコンテキストが指定されていない場合にデフォルトの場面として性的なコンテキストが強く喚起されるというのに留まっている。この点において特定のコンテキストの定着というのは語用論的な性質であると考えべきである。

このような特定のコンテキストの定着も、それぞれの複合動詞に固有の非合成的な性

質であり、個別動詞レベルのコンストラクションが有する特異な性質として考えるべきである。

4. レキシコンにおける語彙の競合

前節では全体的な性質を有する複合動詞について見てきたが、ここでは合成的な複合動詞でも使用頻度が高いものは一つのまとまりとしてレキシコンに登録されていることを支持する「語彙の競合(competition, Aronoff 1976, 2013, Aronoff & Lindsay 2014, Clark 1987, Caballero & Inkelas 2013 を参照)」という現象を取りあげる。

Matsumoto (2011) が指摘したように、複合動詞の可能な結合パターンは「語彙的経済性の原則 (the principle of lexical economy) 」によって制限されている。語彙的経済性の原理はある語形がよりイレギュラーな、あるいはよりシンプルな形式と同じ意味である場合は、不必要なものとして排除される、というものであり(cf. *goed (=went), *pale red (=pink)), 形態論においてよく知られた現象である(Aronoff 1976, Clark 1987, Kiparsky 2005 など)。複合動詞の場合は同じ意味を持つ単純動詞、あるいは「より確立された(more fixed)」複合動詞によってブロックされるという。例えば、「*駆け入る」はより確立された「駆け込む」によって、また、「*走り上がる」は「駆け上がる」によってブロックされる、というものである。Matsumoto (2011) はさらに、「*歩き上がる」が存在しないのも、人間にとって歩くことが普通の移動方法であることから、単純動詞「上がる」が歩く場合に使われることが多く、そのために「*歩き上がる」がブロックされるとしている。

このように、本来ならば意味的にも形式的にも成立可能な語が既存な語によってブロックされるというのは語彙の競合によるものである。そして、語彙の競合が起こるのは複合動詞が一つのまとまりとしてその使用頻度の情報と共にレキシコンに保存されていることを示している。例えば、先の「*走り上がる」の説明は、「駆け上がる」がひとまとまりとしてレキシコンに登録されていないと説明できない。単独動詞で考えると、BCCWJでの「駆ける」の用例数は765であるのに対し、「走る」は14549例もあり、単独動詞ではむしろ「走る」のほうが遥かに使用頻度が高い。しかし、「走り抜く」「走り出る」が存在するのに「*駆け抜く」「*駆け出る」は存在しなかったり、「駆けつける」「駆けのぼる」があるのに「*走りつける」「*走りのぼる」はなかったりする。複合動詞におけるこのような不規則な分布は単独動詞の合成という観点からでも、前項動詞としての使用頻度の差という観点からでも説明できず、最初からひとまとまりとして複合

動詞全体が使用頻度と共に記憶されていると考えなければならない。¹¹

以上のような例は語彙的経済性の原則に基づいて説明することが可能であるが、それでは説明できない例が存在する。例えば、「走り回る」と「駆け回る」、「走り抜ける」と「駆け抜ける」、「走り去る」と「駆け去る」、「走り寄る」と「駆け寄る」のような例は「走り～」と「駆け～」というパターンが両方同時に存在するため、語彙的経済性の原則では説明できない。このような現象は一定以上の頻度があるものは、合成的なものを含めて、全てレキシコンに登録されるという、完全語彙項目記載理論(full entry theory)型のレキシコンを支持している。

松本 (2011) が述べているように、『日本語語彙大系』では 2353 語の単純動詞があるとされているため、理論上では 500 万以上(2353*2352)の複合動詞が存在するということになるが、実際には数千の複合動詞しか存在していない。このように考えると、存在しない語を規則で排除するよりも、実際にあるものをレキシコンに登録したほうが合理的だと言える。例えば、表 2 に挙げた「吹き消す」や「踏み消す」のように、<対象を除去する>ことを表す「～消す」があるが、「*(シミを)焼き消す」「*(キズを)磨き消す」「*(火を)叩き消す」「*(雪を)溶かし消す」「*(ロウソクを)振り消す」「*(汚れを)こすり消す」「*(汚れを)削り消す」は全て存在しない組み合わせである。これらのような存在しない組み合わせを全て排除できる規則があるとは考えにくい。

以上のように、複合動詞というものは全体的な性質を有するものだけでなく、合成的なものであっても、一定の頻度があるものはひとまとまりとしてレキシコンに登録されていると考えるのが妥当である。

5. 結論

本研究は V1 や V2 が単独で使用される時には見られない様々な全体的な性質について見てきた。このような複合動詞の存在は、我々が複合語を産出・理解する際に、合成的と全体的という二つの異なるストラテジーを意味の透明性や慣習化の程度によって使い分けていることを示唆している。

これは全ての複合動詞の意味がその構成要素から導き出せないという主張ではなく、合成的と全体的という二つの理解の方法が存在し、複合語の意味の透明性や慣習化の度合いによって異なる理解方式を取る。そして、両者ははっきりとした境界線があるわけではなく連続体を成すと考える。重要なのはトップダウン型のレキシコンでは全体的な性質が説明できないのに対し、ボトムアップ型のほうは全体的な性質も合成的な性質も

問題なく説明できるということである。このことから、多くの従来の研究のように、input から合成的に複合動詞を作るのではなく、コンストラクション形態論に代表される output-oriented なアプローチから分析するというパラダイムシフトが必要である。

注

* 本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費受付番号 1964 の助成を受けたものである。論文について色々ご意見を頂いた松本曜先生、また、有益なコメントを下された本書の査読の先生方に深く感謝申し上げます。本論文の不備は全て筆者の責任である。

¹ 近年では由本 (2012) が LCS の代案としてクオリア構造(qualia structure, Pustejovsky 1995)という意味構造を用いることを提案し、それに対し、松本 (2011), Matsumoto (2011), 陳 (2011, 2012) は意味フレーム(semantic frame, Fillmore 1982)を取り入れることを主張しているが、ここで重要なのは合成的なアプローチを取るか全体的なアプローチを取るかである。

² 注意したいのは *blogable* がスキーマ(2)の意味から意味拡張しているという点である。*blogable*は<～することができる>という意味から<～することに値する>と意味拡張しているが、これは *readable, writable* のような場合にも見られるもので、*-able* の多義であると思われる。このような多義の場合は下位スキーマ(Boas 2003 における *mini-construction* を参照)を形成していると考えられる。

³ 『複合動詞用例データベース』とは国立国語研究所の山口昌也氏によって開発されたデータベースで、ウェブのデータから機械的に構築するというものであり、ウェブ上で一定量の用例を取得できる場合に限り、収録している。

⁴ この仮定を支持する説としては、英語の動詞の過去形は一部のイレギュラーなものだけがレキシコンに登録され、通常の過去形は規則によってその場で作り出されるという Pinker (1999) の説などがある。言語の冗長性の問題については Jackendoff (2011a) を参照。

⁵ 「気に入る」という表現にも「いる」という語形が見られるが、これも「気に入る」というイディオムに埋め込まれたため、現代日本語に生き残ったものだと考えられる。

⁶ Akita (2014), 史 (2013) によると、V1 が音便形の複合動詞は非正式／ぞんざいに表現するという文体的性質など、合成的に説明できない性質を有する。

⁷ 分析的かどうかは絶対的な基準ではなく、個人差がある。例えば、「食い止める」は縄状のものがめり込む意味で「食う」を理解できる人なら、分析が可能となると思われる。

⁸ 非合成的なものには、複合動詞全体の項が構成要素の項ではないものも見られる。例えば、「ラーメン屋を {*食べる/*歩く/食べ歩く}」「バーを {*飲む/*歩く/飲み歩く}」「夫と {*連れる/*添う/連れ添う}」「掃除を {*言う/*つける/言いつける}」のように、これらの例は複合動詞全体の項構造が構成要素の項から作られるとする影山 (1993) や Fukushima (2005) などの説では説明できないものである。

⁹ ある特定の形でのみ用いられるというのはしばしば見られる現象で、他にも、もっぱら「飽き足りず」などのように否定形で用いられる「飽き足りる」や「食い入るように」という形で使われる「食い入る」などがある。このような特定の形でしか使われないということもコンストラクションの情報として保存する必要がある。

¹⁰ 使用頻度の高い語のほうがより早く知覚されるという「語彙頻度効果(word frequency effect)」も頻度情報が保存されていることを支持している (Grainger & Jacobs 1996, McClelland & Rumelhart 1981 など)。

¹¹ もしかしたら、「走る」と「駆ける」の細かな意味の違いからこのような使い分けが生じている可能性もあるが、それでも言語話者がオンラインで「走る」と「駆ける」の意味の違いを判断して使い分けしているとは考えにくく、通時的な言語使用の中で徐々に形成された使い分けである。そのため、「走り～」と「駆け～」の複合動詞(一定の頻度があるもの)はひとまとまりとしてレキシコンに登録されていると考えなければならない。

参考文献

- Akita, Kimi (2014) Register-specific morphophonological constructions in Japanese. *BLS* 38, 3-18.
- Anderson, Stephen R. (1992) *A-Morphous Morphology*. New York: Cambridge University Press.
- Aronoff, Mark (1976) *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Aronoff, Mark (2007) In the beginning was the word. *Language* 83, 803-830.
- Aronoff, Mark (2013) Competition and the lexicon. *Proceedings of the Annual Meeting of La Società di Linguistica Italiana*.
- Aronoff, Mark and Mark Lindsay (2014) Productivity, blocking, and lexicalization. In Rochelle Lieber and Pavol Štekauer (eds.) *The Handbook of Derivational Morphology*, 67-83. Oxford: Oxford University Press.
- Baayen, R. Harald (2003) Probabilistic approaches to morphology. In Rens Bod, Jennifer Hay,

- and Stefanie Jannedy (eds.) *Probabilistic Linguistics*, 229-287. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Barðdal, Johanna (2008) *Productivity. Evidence from Case and Argument Structure in Icelandic*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Barðdal, Johanna (2011) Lexical vs. structural case: A false dichotomy. *Morphology* 21(3-4), 619-659.
- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*. Stanford: CSLI Publications.
- Booij, Geert (2009) Phrasal names: A constructionist analysis. *Word Structure* 3, 219-240.
- Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Booij, Geert (2012) Inheritance and Construction Morphology. Paper presented at the workshop on 'Default inheritance', University of Kentucky, Lexington KY, 21 -22 May 2012.
- Booij, Geert (2013) Morphology in Construction Grammar. In Thomas Hoffmann and Graeme Trousdale (eds.) *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, 255-273. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan (1985) *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, Joan (2006) From usage to grammar: The mind's response to repetition. *Language* 82, 711-733.
- Bybee, Joan (2007) *Frequency of Use and the Organization of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan (2013) Usage-based theory and exemplar representations of constructions. In Thomas Hoffmann and Graeme Trousdale (eds.) *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, 49-69. Oxford: Oxford University Press.
- Caballero, Gabriela and Sharon Inkelas (2013) Word construction: Tracing an optimal path through the lexicon. *Morphology* 23 (2), 103-143.
- 陳奕廷 (2011) 「複合動詞におけるフレームの融合」, 『国立国語研究所 (NINJAL) 共同研究発表会 : 日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性』, 大阪.
- 陳奕廷 (2012) 「フレームに基づく日本語の V+V 型複合動詞の意味形成」, 『日本言語学会第 145 回大会予稿集』 46-51. 日本言語学会.
- 陳奕廷 (2015) 「日本語の語彙的複合動詞の形成メカニズムについて—中国語との比較

- 対照と合わせて一」神戸大学博士学位論文。
- Chomsky, Noam (1970) Remarks on nominalization. In Roderick Jacobs and Peter Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 184-221. Waltham, MA: Blaisdell.
- Clark, Eve (1987) The principle of contrast: A constraint on language acquisition. In Brian MacWhinney (ed.) *The 20th Annual Carnegie Symposium on Cognition*, 1-33. Hillsdale, NJ: Erlbaum
- Coulson, Seana (2001) *Semantic Leaps: Frame-Shifting and Conceptual Blending in Meaning Construction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William (2003) Lexical rules vs. constructions: A false dichotomy. In Hubert Cuyckens, Thomas Berg, René Dirven, and Klaus-Uwe Panther (eds.) *Motivation in Language: Studies in Honour of Günter Radden*, 49-68. Amsterdam: John Benjamins.
- Croft, William (2012) *Verbs: Aspect and Causal Structure*. Oxford: Oxford University Press.
- Di Sciullo, Anna-Maria and Edwin Williams (1987) *On the Definition of Word*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In Linguistics Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137. Seoul: Hanshin.
- Fukushima, Kazuhiko (2005) Lexical V-V compounds in Japanese: Lexicon vs. Syntax. *Language* 81, 568-612.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Grainger, Jonathan and Arthur M. Jacobs (1996) Orthographic processing in visual word recognition: A multiple read-out model. *Psychological Review* 103, 518-565.
- Halle, Moris (1973) Prolegomena to a theory of word formation. *Linguistic Inquiry* 4.1, 3-16.
- Hay, Jennifer and Harald Baayen (2005) Shifting paradigms: Gradient structure in morphology. *Trends in Cognitive Sciences* 9, 342-348.
- 池原悟・宮崎正弘・白井諭・横尾昭男・中岩浩巳・小倉健太郎・大山芳史・林良彦 (編) (1997) 『日本語語彙大系』 岩波書店。
- 石井雅彦 (2007) 「複合語の形成と『意味表示の二重性』—複合語形成論における『くみあわせ性』と『ひとまとまり性』—」, 『月刊言語』 36 (8), 50-58.

- Jackendoff, Ray (1975) Morphological and semantic regularities in the lexicon. *Language* 51, 639-671.
- Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jakendoff, Ray (2011a) What is the human language faculty? Two views. *Language* 87, 586-624.
- Jakendoff, Ray (2011b) Syntax IN the lexicon. *Handout from a Lecture at 50 years of Linguistics at MIT*.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』 くろしお出版.
- Kiparsky, Paul (2005) Blocking and periphrasis in inflectional paradigms. *Yearbook of Morphology 2004*, 35-113.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar; Vol. 1, Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford: Oxford University Press.
- Lieber, Rochelle (1980) *On the Organization of the Lexicon*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Lieber, Rochelle (1992) *Deconstructing Morphology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lindstromberg, Seth (2010) *English Prepositions Explained: Revised edition*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 松本曜 (2009) 「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 175-194. くろしお出版.
- 松本曜 (2011) 「主語一致の原則と主体的移動を伴う事象を表す複合動詞」, 『国立国語研究所 (NINJAL) 共同研究発表会: 日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性』, 大阪.
- Matsumoto, Yo (2011) Compound verbs in Japanese: Types and constraints. Presentation given on November 2nd, 2011 at the Faculty of Oriental Studies, University of Oxford.
- Matsumoto, Yo (2012) A constructional account of Verb-Verb compound verbs in Japanese. *Book of Abstract of 7th International Conference on Construction Grammar (ICCG7)*, 117-118.
- McClelland, James L. and David E. Rumelhart (1981) An interactive activation model of context effects in letter perception: Part 1. An account of basic findings. *Psychological Review* 88,

375-407.

Mos, Maria (2010) *Complex Lexical Items*. Utrecht: LOT.

野田大志 (2007) 「分析可能性の低い語彙的複合動詞に関する一考察—『落ち着く』の意味分析—」, 『日本認知言語学会論文集』 7, 500-510.

野田大志 (2011) 「現代日本語における複合語の意味形成 : 構文理論によるアプローチ」
名古屋大学博士学位論文.

Pinker, Steven (1999) *Words and Rules: The Ingredients of Language*. New York: HarperCollins.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

斎藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』 ひつじ書房.

Selkirk, Elizabeth (1982) *The Syntax of Words*. Cambridge, MA: MIT Press.

史春花 (2013) 「コンストラクション形態論から見た日本語の促音便複合動詞」, 『認知言語学会論文集』 13, 272-284.

史春花 (2014) 「日本語における促音形／撥音形複合動詞の諸相—コンストラクション形態論からのアプローチ—」 神戸大学博士学位論文.

Tomasello, Michael (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』 ひつじ書房.

由本陽子 (2008) 「複合動詞における項の具現—統語的複合と語彙的複合の差異—」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.4』 1-30. ひつじ書房.

由本陽子 (2012) 「日本語語彙的複合動詞の生産性と二つの動詞の意味関係」, 『日本語学会第 145 回大会予稿集』 340-345. 日本言語学会.

Websites

現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ). <<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>>

Web データに基づく複合動詞用例データベース. <<http://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php/>>

Abstract

Japanese Lexical Compound Verbs as Constructions

Yiting Chen

As Langacker (1987, 2008) and Croft (2001) claim, there is no clear-cut boundaries exist between lexicon and syntax. In this vein, the present study aims at showing that Japanese lexical compound verbs [V1 V2]_V (see Kageyama 1993), can be best captured as “constructions” within the framework of Construction Morphology (Booij 2010). Japanese lexical compound verbs possess non-compositional properties, which can be found in both morphology and semantics. With regard to morphology, there are “bound morphemes,” which appear only as part of a larger word. As to semantics, compounds possess “bound meaning,” the new and quite specific meanings of V1 or V2 when embedded in compounds (Booij 2010: 61). Moreover, there are a number of non-compositional compound verbs whose meaning cannot be synthesized from the meaning of their components. Examining these non-compositional compound verbs in a usage-based approach, this study shows that non-compositional compounds require high token frequency to support their meaning to be maintained and shared by a language community. Most importantly, the rule-based (top-down) approach in previous studies cannot explain these non-compositional properties. Instead, the usage-based (bottom-up) approach such as Construction Morphology can provide an adequate account for both compositional and non-compositional properties of compound verbs.